

本論文は「全国友の会」の研究論文である。「全国友の会」とは、1930（昭和 5）年に、羽仁もと子によって創設された、『婦人之友』の愛読者組織である。2013 年 3 月現在、全国に約 20,000 人の会員をもち、国内外 188 の「友の会」によって構成されている。創立以来、任意団体という形態を維持し、会員は主婦を中心とした一般女性であり、活動資金は 100% 自己資金ある。活動内容は、家庭を簡素にすることがより良い社会の形成につながるという信念のもとに、家事や家計の実践方法を、講習会などを通じて広く社会に伝えようとするものであり、その方針は創立以来変わっていない。

本論文の目的は、第一に、日本近現代史における「全国友の会」の社会的役割の変容を明らかにすることである。そして第二に、その分析結果から「全国友の会」の組織特性を明らかにし、「全国友の会」の会員層であるアッパーミドルの生活意識の変容を社会史の文脈でとらえることである。

筆者は、「全国友の会」と社会の距離を測るために、「全国友の会」の活動のキーワードである「生活合理化」という言葉を分析軸として用いている。生活合理化という言葉は、創立以来「全国友の会」の活動指針となっている言葉であるが、「全国友の会」は、時代とともにその言葉の解釈を変化させている。したがって、「全国友の会」がどのような文脈で「生活合理化」という言葉を用いているかをとらえることによって、その時代の「全国友の会」会員の生活意識の変容をとらえることができると同時に、社会における「全国友の会」のポジションを確認することができる、という観点から分析がなされている。

序章では、時代ごとの分析に入る前に必要な情報として、現在の「全国友の会」の組織概要と、関連団体である婦人之友社、自由学園との関係を解説している。

第一章「明治・大正期の『婦人之友』から読みとる生活合理化への助走 ―創設者羽仁もと子の思想形成プロセスをふまえて」では、創設者羽仁もと子が生活合理化という思想にたどり着くまでの思想形成プロセスをふまえた上で、羽仁もと子が、夫・羽仁吉一と共に『婦人之友』を創刊し、意識的に知識階級の女性たちを読者対象に設定していたことを明らかにしている。さらに、「全国友の会」の前身組織である「婦人之友読者組合」を、他誌の読者組織と比較することで、羽仁もと子が目指したのは、知識階級の女性たちの組織化であったことを示している。

また、筆者は、関東大震災がもたらした生活意識への影響に注目し、関東大震災後の「生活を簡素にする」という気運の高まりが、後に「生活合理化」という概念が拡大する布石となることを指摘している。加えて、羽仁もと子と自由学園の生徒たちが関東大震災罹災者支援活動で、初めて実践的な社会活動に参加したことを重視し、自由学園の生徒たちが後に「全国友の会」の会員となることから、関東大震災での罹災者支援活動が、現在の「全国友の会」の社会活動の原点であることを示している。

第二章「戦前・戦中・戦後の「全国友の会」〈第Ⅰ期〉：1930-1954 —知識階級の妻たちによる啓蒙運動としての生活合理化」では、1930（昭和5）年に「全国友の会」が創立されてから、戦後の1954（昭和29）年までを対象としている。

筆者は、「全国友の会」が創立された1930（昭和5）年に、「生活合理化」という言葉が「産業合理化」の派生語として登場した経緯を、当時の新聞や雑誌記事の分析によって明らかにしている。「生活合理化」という概念の登場により、「全国友の会」は具体的な活動指針を手に入れ、「生活合理化」に基づいた家庭経営を伝えるための啓蒙運動を全国で展開した。生活合理化は、戦時体制下においては、貯蓄奨励のための国策支援となり、終戦後においては戦後復興のためにと、目的がすり替わっている。しかし、「生活合理化」が啓蒙活動であるという点においては、戦前・戦中・戦後まで一貫しているのである。

第三章「高度経済成長期の「全国友の会」〈第Ⅱ期〉：1955-1974 —専業主婦による暮らしのカイゼンとしての生活合理化」では、高度経済成長期の「全国友の会」について論じている。新しい時代に適応した暮らしのノウハウを学べる「全国友の会」は、戦後多くの新規入会者を獲得し、活動の中心は戦後入会者に移っていた。羽仁もと子亡き後、「全国友の会」では、卓越した家事技術を持った何人かの会員が、その技術力で新人会員を牽引するものの、リーダーシップは分散し、その一方で、活動内容については、全国統一化の傾向がみられる。

この時期の「全国友の会」は、現場主義による「カイゼン」で産業界を支えたQCサークル活動と多くの類似点を持っている。「全国友の会」には、家庭という家事の現場から発信された暮らしのカイゼン策が、「最寄」とよばれる7～8人の小集団の機能を活かして、全国で共有されていく仕組みが出来上がっていたのである。

第四章「個人消費の時代の「全国友の会」〈第Ⅲ期〉：1975-1994 —一時流とは無縁の、伝承の技としての生活合理化」では、1975年から1994年までの20年間を対象としている。この時期、「全国友の会」は、戦後教育を受けたニューファミリー層が組織の中核となっている。入会者・退会者が共に減少したために、会員が固定化されると同時に、生活合理

化のための技術が体系化され、伝承されているのが、この時期の特徴である。

1970年代後半になると、日本の消費構造は、「モノ消費」から「意味消費」へと大きく変化し、「生活合理化」は時代遅れとなっていく。この時「全国友の会」は、意識的に時流に流されまいと、生活合理化の実践を堅持し、「意味消費」にブレーキをかける側に立っている。その結果、社会の潮流と乖離した独自の価値観で暮らす主婦同士のつながりは、会員間の仲間意識、つまりアイデンティティを強めることにつながり、「全国友の会」は、同質性を持った主婦の全国ネットワークという性格を強め、「転勤族」の妻たちの受け皿という社会的役割を担っていたのである。

第五章「危機管理時代における「全国友の会」〈第Ⅳ期〉：1995- からだに染み付いた、生きるための基礎としての生活合理化」では、現在の「全国友の会」について論じられている。現在の「全国友の会」を捉えるポイントは、組織の弱体化と「生活合理化」の再評価が同時におきているということである。「全国友の会」の組織の弱体化とは、入会者数の減少により、総会員数の減少傾向が続いていることと、会員の高齢化である。2013年3月現在、会員の半数以上が60歳代以上である。

そのような中、「全国友の会」会員たちの「生活合理化」が、危機管理の時代を生き抜くための生活術として、再評価されはじめる。会員たちは、「生活合理化」の実践を徹底的に繰り返してきた結果、「家庭を簡素にする」ための家事が、当たり前のことのようにからだに染み付いている。からだに染みついた家事技術は、災害事に生活の知恵として機能した。また、持ち物の数を少なく暮らすことや、エネルギー消費を抑える家事技術は、環境問題に直面している現代社会に適した暮らし方として注目されているのである。

第六章は、まとめの章である。「生活合理化」という言葉を分析軸とし、「全国友の会」について通史的な分析を行ってきた結果、「全国友の会」の社会における役割が時代とともに変容していることが確認できた一方で、会員たちが「実践」している暮らし方自体は変容していなかったということが判明した。したがって、研究を通じて見えてきたことは、「全国友の会」の変容ではなく、私たちの日常がどれだけ急激に変化したのかという「近代化のダイナミズム」であった。

筆者は、現在「生活合理化」という暮らし方が再評価されていることについては、かつて当たり前だった暮らし方に、希少価値が付加された結果であると分析している。会員たちは「家庭は簡素に社会は豊富に」というヴィジョンに支えられることによって、「家事」に社会的な意味付けを行い、共に実践する「仲間」と「場」を持つことによって、昔ながらの家事を現在に伝承してきたという指摘である。

さらに、消費の観点からは、「生活合理化」の再評価は社会が「モノ消費」への回帰を欲していることの表れであり、環境問題、災害対策、高齢化社会、といった多くの問題を抱える現代社会を生きぬくために、人々が「脱・意味消費」を模索しているのだと分析している。

以上のような分析から、筆者は、再評価すべきは、「生活合理化」ではなく、社会環境が変化しても生活合理化を伝承しつづけることができた、「全国友の会」が持つ伝承の仕組みである、と結論付けている。そして「全国友の会」の組織特性として見えてきた、私的領域と公的領域のあいまいさや、合議によって毎年リーダーを変えるとといった非合理性には、組織を常に有機体として維持する効果があるという考察を加えている。本論文によって示された結果は、非営利組織が組織のシステム化を防ぎながら理念と実践を継続するためには、どのような組織運営が有効であるかについて、多くの示唆を与えている。